

新年、明けましておめでとうございます。皆様方の中には、家族と共にゆっくりにお正月を過ごされた方もいらっしゃるが、逆に平成2年第1号の生命誕生に出会われた方、救急車の対応に目まぐるしい三が日を過ごされた方、さまざまであったことでしょう。

私も数年前までは、美しい晴れ着姿で初詣される人たちを横目に、救急車で搬送された妊産婦さんとの格闘で、お正月などどこへやらの生活をしてきました。

前回の山本美知代さんとの出逢いは、この病院勤務時代でした。山本さんは、教科書と参考書を頭一杯に詰め込んでカチカチの新卒1年生であった私に、助産婦として、また社会人として公私共に御指導下さった、優しい姉のような素敵な先輩です。

その先輩からの「りれー随筆」の依頼。迷いと不安が葛藤していたにもかかわらず「ね、書いてごらんよ」との包容力ある一言に、いつの間にか「はい」と答えていたのです。

臨床から行政へ

私は学生時代から、助産婦として臨床経験をした後に、その経験を持って保健婦として勤務していきたくと考え、地元の広島県内で分娩件数最多の広島市民病院へ就職しました。

予想通り、分娩件数は月平均140件、多い月は150～160件にものぼり、毎日児心音と産声の連続でした。ほとんどの方は、家族の愛に守られ、可愛い宝物である赤ちゃんを胸に退院していきます。しかし、その陰で、何度も流産を繰り返したりやっとの思いで妊娠を継続している人、今回も愛児を抱く夢叶わず涙を押さえて帰って行く人など、さまざまな人生模様を見てきました。

そんな中でいつも考えたのは、この人たちには、退院後どんな生活が待っているのだろう

りれー随筆 ⑥9

広島県竹原保健所

岡本鈴美

か、病院での生活は人生のほんのひとコマに過ぎない、地域に帰ってからが本当の生活のはずなのに、ということでした。しかし私たち病院勤務者は、退院した彼女たちの右往左往する生の生活を、ほとんど見るできないのが実情でした。

このような悩みを持ちつつ毎日を送っていた折り、偶然にも広島県が保健婦を採用することを知りました。受験願書の締切まで、なんと、あと1時間というときでした。そこで、病棟の廊下にある公衆電話から父に相談しました。その時、父からももらった答えがこれでした。

「試験を受ける受けないと考える前に、まず願書を出してみてもいいかな」

この父の一言から、早いもので3年が経とうとしています。この一言がなければ機を失い、今も助産婦として病棟を走り回っていたに違いありません。

この3年間に、病院時代には見ることもできなかった、地域へ帰った妊婦さんたちのヒヤヒヤビクビクの生活ぶりや、新米ママさんたちのほほえましい育児戦争に触れることができました。「退院したらお乳が出なくなりました」「赤ちゃんってこんなに泣くんですか」など、私たちから見れば不思議な質問かもしれませんが、訊いてくる本人は皆、真剣そのものです。

いつも心に添えて

進・維持および教育に関して主要な責任を持つべきである。そのためには、ケア・教育・研究の質の高いプログラムの維持にも責任を持たねばならない”というアメリカの発表でした。

あれから10年、日本も高齢化社会となり、労働状況やソーシャルネットワーク・家族パターンも変化してきています。それに対応できる看護教育を促進することも、今を生きる私たち実践者の責務であることを、切に感じている昨今です。

人間として

広島県は13市15郡からなり、人口約280万人、人口の数では全国11位の県です。その中に、県と政令市を合わせ22の保健所が設置されています。病院数は、首都東京都が人口10万対165.0に比べ126.9と低く、まだ患者が病院を選ぶ時代にはなっていません。「お願いです、私の赤ちゃんを」と、藁をも掴む気持ちで患者さんは病院の扉を叩いているのです。だからこそ、そこで出逢う私たち看護者の表情や言葉は、鋭く相手に観察されています。

医学の進歩や経済的豊かさの陰に、心の豊かさが置き去られてしまいそうな現在、人間は誰かを支え、そして誰かに支えられて生かされていることを、人間として、忘れてはならないと強く感じています。特に看護教育は、そのことを忘れてはならないのではないのでしょうか。

山本さんから頂いた“素人の一言を真剣に受け止める本当の専門家”の言葉を胸に、人の心を大切にできる“caring healthworker”を目指して、皆様方の御支援を受けながら、歩み続けたいと思っています。

* * *

次のバトンを、学生時代同じキャンパスで学んだとってもチャームングな友、元木さち子さんに、心を添えて渡します。ヨロシクネ！

●
そうです、環境の変化や子供が成長するにつれ、彼女たちは入院中の1～2週間では想像もできなかった疑問と不安で、汗だくの毎日を送っているのです。こんな時私は、ケースバイケースで、助産婦になったり保健婦になったり。そしてもう一つ、種々の法律や条例等に基づいた健康診査や保健指導、医療援護など、行政の立場だからこそ可能な援助を共に考え支援する行政ウーマンになったりと、私自身も大粒の汗を流しつつ、ママさん方に教えられながらの日々を送っています。

プラクティショナーとしての看護

●
助産婦から保健婦になり、これまで医療チームの一員として、患者・地域住民・スタッフとのさまざまな触れ合いの中で学んだことは、practitioner(プラクティショナー、責任を伴う実践者)としての自覚とその重要性です。

私がこの言葉を初めて耳にしたのは、昭和52年に日本武道館で開催された、第16回国際看護婦協会(ICN)大会に参加した時です。当時学生であった私は、あの広い武道館一杯に集まった世界各国の看護者たちの熱気と、一人ひとりの全身から溢れる専門職としての自信や輝きに、この上ない感動を受けたのでした。

そこで印象的だったのは、“看護は保健の増